
終末のアポロギア

乃上スナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末のアポロギア

【Zコード】

Z9372V

【作者名】

乃上スナイ

【あらすじ】

圈点（傍点）及びルビを多用していますので、Internet Explorerでの閲覧をお勧めします。十六年前の震災から復興した日本海沿岸のと或る町に住む高校生、愛沢澄美香は、或る日々の前で不可解な言動を取る少年と出会う。その後町では奇妙な群発地震が発生し始め、澄美香はその原因と少年との間に何かつながりがあるのではないかと考え始めるのだが……。第六回BOX-AiR新人賞落選作（「BOX-AiR 05号」にて同タイトルで講評が掲載されています）。本作は架空の大震災・大津

波の被災地を舞台に取つています。実際に何らかの災害の被害に遭われた方や関係者の方の中には、或いは作中での災害の取り扱いに不快感を覚える方がおられるかもしれません。お読みになる前に以上の方をどうかご確認お願い申し上げます。

第1話 「イエローガーデン（前編）」（前書き）

本作は架空の大震災・大津波の被災地を舞台に取っています。

実際に何らかの災害の被害に遭われた方や関係者の方の中には、或いは作中での災害の取り扱いに不快感を覚える方がおられるかもしれません。

お読みになる前に以上の点をどうかご確認お願い申し上げます。

第1話 「イヒローガーテン（前編）」

その町は子供心にも確かに不思議だと思われるような場所だった。辺りを見回せば嫌に黄色い花ばかりが田に付いたし、家はみな丘陵地帯の斜面にへばりつくように立ち並んでいて、そこから眺める足元の地平にはあたかも広大な屁みなもいだ水面を思わせるような一面のガラス板が敷き詰められていた。

だからそう……、空の青さと白い雲の影。それはただ横にばかりではなく、上下にも同様にパノラマ的な広がりを見せていて、初めてそれを田にした時まるで遙か上空へと身一つで放り出されでもしたかのような錯覚に私は囚われたのである。

けれどそんな風な新鮮な驚きに満ち溢れていたかつての異国も今や日々を彩る背景へとすっかりと慣れ親しんでいて、春は菜の花、夏は向日葵、至る所でそれらシンボルフロワーの咲き匂においこの町は、私にとつてもう紛れもないホームタウンと相成っていたのであった。

「おかーさん！　ねえ、おかーさん！」

洗面所からキッチンへと行きすがら、非難がましい声で母を呼ぶ。「髪留め、知らない？」

昨日の夜には確かにあつたはずのものがしかし忽然と姿を消してしまっていた。なのでその所在を一番知つていそうな相手に尋ねるのだが、「何？　また無くしたの？」

「無くしてないって、無くなつたの」

「だから無くしたんでしょう？」

「だーかーらー」今一意思の疎通が上手く行かない。けれど今は緊急事態である。

「もういいや」私はふて腐れた声を上げつつも、取り敢えずはそう

「いつににしておこうと方針を転換することにした。

「昨日洗面所に置いておいたんだってば。……私の髪留め。見なかつた？」

「髪留めってあれでしょ？ ピンクのやつ」

「青いやつだつてば！」 今年の正月に隣町で買つてきたものである。それまで使つていたピンクのものが急に子供染みてしるようになつて衝動的に買い換えたのだったのだけれど……、「もうそれでいいや」 差し迫つた状況の前では妥協も已むなしである。私はぐるりと体を翻して部屋へと取つて返すこととした。

「だからいつもその辺に放つておかないでつて言つてゐるのに……」

ため息交じりの母の声を背中に受けつつ廊下を逆戻り。私は一階の自分の部屋からハート型のピンクの髪留めを取つて来ると、洗面所へと飛び込みいつもの場所へとそれを留めた。こうしておかないと生来天然パーマの氣けがある私の前髪は言うことを聞いてくれないのである。今はまだ湿気の少ない時期で助かっているけれど、あと数ヶ月もすれば地獄の梅雨の季節がやって来る。そうなれば朝の手間は今の比でなくなることは火を見るよりも明らかだつた。

再び廊下をキッチンの方へと向かい、今度は途中で折れて部屋の中に入る。と、ダイニングでは無人の食卓の傍でテレビがひとり言を呴き続けていた。

「あれ、おばあちゃんは？」 いつもならそこでじつとテレビのニュースに耳を傾けていはるはずの人物がいない。なのでキッチンに向かつて尋ねると、「ああ、何だか早くから出掛けちやつて……、ちょっと慰靈碑まで行つて来るとかつて」

「慰靈碑？」 思わず聞き返さざるを得なかつた。だつてその「慰靈碑」が私の知つてゐる「慰靈碑」と同じものであるとするならば、ちょっとした散歩のつもりで向かえるような距離ではないはずである。故に眉を顰ひそめて訝しむより他なかつたのだけれど……、「ああ」 そうかと、私はいつもの自分の席へと腰を下ろしつつ納得していた。田の前のテレビがちょつとそのことについて触れてくる。

「せ、今日は……」

「う、キッキンからやつてきた母からポテトサラダを受け取りつ頷く。

やうなのである。今日は一年の内で最もこの町が厳肅な雰囲気に包まれる日。つまりはやつ、『十六年目の震災記念日です』

テレビのアナウンサーがゆっくじと、歯み締めるよつに言つた。

「でもあとでまた行くんでしょう？」

「あんたもよ？」

「分かつてるよ」それはもう例年のことであった。今更言われなくともそのつもりだったのだが、トーストに齧り付きながら答えるとしつこく念押しの声が掛かつた。

「学校が終わる頃に迎えに行くから、ちやんと校門の前で待つてね？」

「はいはい」お座なりの返答を返しつつも食事のペースを上げる。そろそろタイムミットが近い。私はテレビのニュースが次の話題へと移る前にじつにか朝食を平らげると、席を蹴立て立ち上がり、「うそーさま！」玄関へと向かう途次、廊下に置いておいた鞄をピックアップする。

「ああ、それとね」

「え？ 何？」靴を履きながらキッキンからの声に応える。何かあるなら一度に言つて欲しいものであるが、なお悪ことにそれはひどく今更な用件であった。

「十六歳……、誕生日おめでとう」

思わず眉根に皺が寄る。とは言え今は時間がないので言いたいことは胸に秘めつつ小さくため息。そしてその憤りをバネに立ち上がると、「行つてきます！」

田の前のドアを開いてその向こう、あの日見た一面のパノラマが待つであろう世界へと向けて力いっぱいに駆け出していたのだった。

沿岸の広大な平原地帯を埋めるその田畠ゆいばかりの人工の青海原 ソーラーパネルの群れを眼下に臨む我が家からすぐ目と鼻の先。通り慣れたバス停には折も折、これ以上ないというタイミングで駅へと向かうバスがすべり込んでくるところだった。

私はいつも通りに平野側の席を確保すると、体を深く背もたれへと押しやり乱れた息を整える。と、時を置かずに動き出した車両の重力に促されるようにして、私の視線は自然と窓の外へと向いていた。

その先にある何とも壮大な眺めはいつも通りである。

あたかも青い海原のように、一面深い碧瑠璃を湛えているそれらソーラーパネルの群は、今から十年程前に設置が開始されたもので、その数年後にはすでに今のような姿で完成されていた。そのことはまだ幼い時分に祖母の家へと遊びにやつて来ていた私の記憶にも強烈に残されている。

けれども初めて見た時には思わず全身の震えが止まらなかつたような光景もしかし、今となつてはすでにもう数年来の、という但し書きが付く、何とも馴染み深いものと成り果てて久しかつた。

私たち一家がこの町へと越してきてからもうかれこれ五年になる。当時小学生だった私も今や地元の国立高校へと入学して一年近い、この春でもう二年生になる予定なのであつた。

最近では学校まで向かう道のりとて手慣れたもので、始めの内は何かと面倒に感じられていたバスと電車を乗り継いでの通学もそれ程苦痛とも思わない。

万事が平凡、万事が平穏、そんな毎日であった。

「おはよー。澄美香^{すみか}」

割と始業時間限り限りに教室までたどり着くと、ナ」「！」と新井日名子が前の席から体をこちらへと捩じ向けていた。

「おはよ」それに応えつつ自分の席に腰を下ろす。と、「どうしたの？」

「え？」何やら気にかかることがあつたらしい。何事かを尋ね掛けてくるのだが、生憎自分では自覚がなかつた。短い返答に聞き返す。

「いや、なんかいつもよりテンション低くない？」

「ああ……、うん」そこでようやく無意識にため息を吐いている自分が気づいた。

「うちのおばあちゃんがさ、なんか朝からいなくて」

「おばあちゃん？」

「うん」ナ」「は中学からの友人である。うちにも何度も遊びに来ているのでもちろん祖母とも面識があつた。「なんか慰靈碑の方まで行つたらしくって」

「慰靈碑って……、ああ」そつか、と何やら納得するものがあつたらしい。「今日だもんね。記念日」

「うん、でも去年はこんなことなかつたのに……、なんでだらう」今から丁度一年前、震災十五周年を記念する慰靈式典は例年のそれよりも大分規模の大きなものとなつていた。とはいえ私にとっては毎年のことである。心構えの上ではさしたる違いはなかつたし、それはおばあちゃんも同じであるように見受けられていた。なのにどうして今年に限つてなのだろう。

そんなことを何とはなしに考えていると、それは余り意外でもないといわんばかりの合いの手が入つた。

「まあなんか色々言われてるもんね。最近」

「え？ 何が？」けれど私にとつては意外も意外である。

「何がつて……、ほら、二週間くらい前だつて？ 南米の方で地震あつたじやん」

「え？」

「何？ 知らなかつたの？」

「あ……、いや。確かになんかテレビでやつてたかも。ちょっとだけ」

今朝のテレビの一ニュースを思い出してみる。確かにそれらしいことを少しだけ言つていたような気もした。

「それがさ、十六年前とおんなじような感じだからつて……」

「おんなじ?」

「連想させるつてこと。時期的にさ。海外で大きな地震があつてそれが波及してくるみたいなタイミングで起つたんだつて、十六年前の地震。だからなんていうか……」

そう、と、何やらじつくりと考えた末の言葉としてはそれはひどくシンプルな、けれどそれでいて無性に胸をざわめかせるものであった。

「不安……、なんじやないのかな」

ナコの話はなんだか分かるよつたな、けれどもよく分からなによつたな、何とも言い難い物言いのように私には思えた。

だつてそれはもう十六年も昔の話である。

奇しくも私の誕生日と同じ日に起つたその未曾有の大災害は、けれども今となつてはその被害の痕跡を探すことすら困難な代物なのである。

もし仮に今また同じような災害が起つたとしても、その被害は決して十六年前のそれを踏襲しない。その為にこそこの町は過去の教訓を踏まえて世界に類を見ない堅固な防災性をこの十数年間で着実に会得してきたのである。

なのに一体祖母は何を根拠に不安を感じているというのだろう。

それはもちろんナコ本人にも確証などない、何とはなしの推測に過ぎなかつただろう。けれど私とても同じである。そんなふうな嫌に信憑性のありそうな話を聞かされてしまつたが最後、事実がど

うあれもしかしたらという疑念は中々頭から離れてはくれずにして、結局それはその日最後の授業が始まるまで延々私の心を悩ませてやまなかつたのである。

六時間目授業開始早々、例のあの徐々に音階を上がつてゆく特徴的なチャイムがスピーカーから流れたあとで、誰かは分からなければ教師の声で告げるアナウンスが流れてきた。

『全校生徒のみなさんにお知らせします』

けれどそれはもちろん朝の内に担任から聞き及んでいたことである。なお且つ言えば昔からこの辺りに住んでいる私たちにとつては今更事改めての説明も必要のないものであった。

故に教壇から降りつつ放送に集中するよう促す数学教師の言葉など待つまでもなく自然と手は止まり、顔は机の上へと俯けられていて クラス全員がもちろんそつだつた。一分間の黙祷を求めるアナウンスが流れる頃にはすでにもう意識は深く目蓋の裏へと溶けていた。その中で、なぜだろう。ふと思いついたのである。もしかしたら彼女 祖母に取つて十六年前の震災はまだ終わっていないのかもしれない、と。

「あー、終わつた終わつた」

どうせそこまで熱心に授業など聞いてはいなかつただろうに、昇降口へと廊下を行きつつナコが盛大に伸びをする。「これで今週はあと一日。でもつてあと一週間もすれば」

「春休み?」

「の前にテスト返却と卒業式があるけどね」と、言葉を継いだ私の声に更なる補足を付け加えたのはもちろんナコではない。もう一人の我らが友人、富藤七海であつた。

「つて水差さないでよ」

「別に水差したつもりはないけど」

「差して差して差して」

「いつでもどこか一歩引いた位置から私たちのことを見ている彼女は一見クールな性格のようにも見えるのだけれど、実際はただのマペース。どちらかと言えば天然の氣のある少女だった。ただ単に面倒くさくないからといつ理由だけでそうされているような、飾り気なくセンターから左右に梳き流されたロングのストレートを靡かせつつ叫ぶ。

「で、今日はこれからどうするの？」

「どうするって？」

透かさず反問するナコに応えつつもしかし、視線だけはこちらに向いていた。

「だつてほら……、ねえ」と、一体何だらか。何か私に関係があることなのだろうか。

今ひとつ分からずにぼんやりとしていると、「別に大層なプレゼントとか用意してるわけじゃないけどさ。ケーキ奢るくらいは普通に考えてたんだけど」

「あ……」そっかと、そこでようやく気がついた。

これまで例年そうだったので忘れていたが、今年からは今までのようにはいかない。彼女のよう事情を知らない人には前以て言っておかなければならぬはずだったのだ。

「いや……、この子の場合はさ、毎年そうなんだけど」

「ごめん。今日はこれからちょっと予定があつて」ナコのフオローに被せるように自ら叫ぶ。と、「用事？」

「うん」一体全体それはどんな用事なのだろうと顔全体が語つていた。けれどもそれは無理もない反応である。なぜなら彼女は俗にい「移入組」と呼ばれる人間であり、しかもこの町へと越してきたのはつい一年前、高校入学と同時になのである。すでにもう五年来この町に住んでいる私やナコのようには今日といつ日を特別視できないのは当然のことだった。だから少しぐためらいがちに、けれども率直に、友人からの折角の申し出を断らざるを得なかつたその故

を告げた私に少しだけ彼女は氣不味そつた顔をした。

「ちょっと……、慰靈祭にね」

今から十六年前、未曾有の大災害に見舞われた私たちの町は、その復興の過程において不可避的な人的資源の補充を余儀なくされていた。

一つにそれは震災の余波である原発事故が齎した住民流出が原因であり、一つにそれは震災そのもの、多くは太平洋から押し寄せた大津波によって奪われた直接的な人的損害が原因である。

数にしておよそ二千人。被災地域全体の被害からしてみれば十分の一にも満たない数ではあるけれど、市町村単位で見れば決して少ない被害ではなかつた。それだけの人命が一瞬にして奪われてしまつたのである。

以来住民の生活圏である丘陵地帯を除くほとんど全ての低地が原則的には居住禁止区域とされて、今や一面のソーラーパネルと菜の花畑に覆い尽くされていた。

「澄美香……、澄美香？」

「え？」窓の外を流れる景色に今は無きかつての町の風景などを想像していると、隣の運転席から声が掛かつた。「何？」

「いや……、もしかして今日何か約束とかあつた？」

「ううん。別に」

何だろう。何やら声の調子が深刻そうだったのでつと重大な話かと思つたら、意外に肩透かしである。

私は振り向けた視線を元へと戻しつづぶつ切ら棒に問う。「それが何？」

「何……つてわけじゃないけどほら、誕生日なんだし、お友達から何か誘われたりとかしてなかつたのかな……って」

朝家を出る時にはこちらの方が待つことになるような言い方だつ

たにもかかわらず、いざ校門の前まで行つてみると、そこにはすでにもううちの車が堂々と横付けにされていた。その時一緒にいたナコたちの姿を見て、そんなことを思ったのかもしれない。

別にいいまでやることを優先してやらなければならぬいてわけでもないからさ。前もつて言ってくれれば別に

分がつてるよ」

されどやんな」とはもう今までに幾度となく聞かれてきていることである。今更と言えば今更の話であった。

二〇

そればかりか納得し切れていないと、うような口振りではあつたものの、母はひと言告げるとそれきり口を閉ざした。それから私は再び意識を窓の外へと集中させて、今ではない、見も知らぬ時代の風景をそこへと思い浮かべてみようと試みる。けれどそれは容易には敵わぬことであった。なぜなら私の視線は早くも暮れ始めた空の色を映して仄かに赤い一面のソーラーパネルの上に広がる空漠とした虚空をさ迷うのみで、どこにも引っ掛けりを得ることなどできないのである。

この町はそう、余りにも「空白」が多過ぎた。
それは例えば今日の前にあるような実際の空間としての空白であ
つたり、またはその在り処を社会という田には見えない場所に持つ
ものであつたりした。

これら空虚な傷跡を覆い隠すために必要とされたものがつまりはこれら一面のソーラーパネルの群れであり、また彼ら 俗に「移入組」と呼ばれる人々たちなのである。

それでは翻つて私たちのような人間はなんと呼ぶのかと言われれば、それはそのものすばり「帰郷組」と言つた。被災後の一時期を否応なく外で過ごしたもの、当時まるで焼け野原と称されたこの場所 被災地へと、それでも帰つて来た人々のことである。

私自身は生まれも育ちも域外なので厳密に言えばその言葉の定義には掛からないのだけれど、この町は父の故郷であつた。

そして祖母と、今は亡き祖父が長年を生きた思い出の場所でもある。

この町に住むそれら人々にとつて、今日といつこの日はもちろんただの震災記念日というだけでは終わらない特別な日なのであった。

一日の旅程をようやく終えて、遙か西の果てへとたどり着いた太陽は、すでに半身を山の端に隠し、暗い、長い影を私たちの元へと投げ掛けていた。

広場の中央にすえられたモニコメントは純白の大理石を夕茜に染めて、今や淡い鴉色である。

広場のそこそこには蠅燭の仄かな揺らめきが照らし、薄闇の中から更なる闇を炙り出さんとでもしているかのよう。赤々と灯る炎の光に広場は一種異様の夢幻境へと様相を変じ、辺りには最早賑やかな人声^{ひとじやく}は絶えていた。

今宵はそう、十六年目の慰靈祭である。

去年は十五周年といつることもあつて取材に駆け着けたマスコミの数も多めであつたと記憶しているが、今年はその反動とばかりに部外者の姿は少ない。

そんな中、しかし私たちにとっては例年通りの今日といつこの日である。

肅々と進む式典は町長の開式の言葉から始まって、今はもう遺族代表による追悼の言葉も終わり、参列者全員での献花が始まっているところであった。

私と祖母は一人並んで手に花を携えつつ、自分たちの順番が回ってくるのを待つていて、と、また一つ順繰りに行列が進み、私と祖母は一步足を前へと踏み出した。そのあとを母も一つ後ろから追つて来ているはずである。

そして誰も、誰一人、もちろん無意味に声を発する者はいない。

聞こえるのは時折起る咳払いのよつな、或いは嗚咽のよつな小さな声と、そして聳える慰靈碑の向こうから伝わってくる静かな波の音だけである。

こんな時には私はいつもそうだった。一体どんなふうな顔をすればいいのか分からなくなる。

子供の頃、まだまだ周囲の事情に無頓着でいた頃は良かった。雰囲気に呑まれるだけで自然と思考が頭の中から消えてくれたからである。でももちろん今は違う。

考えまいと、考えても仕方のないことだと自分自身に言い聞かせれば聞かせる程に、無意味に思考は空転し、ぐるぐると同じところを回り続ける。

どうして私はこんなことになるのだろう。

何でそれをみんなおかしいと思わないのだろう。

だって私は何も知らない。

十六年前、私がこの世に生を享けるのと相前後して起った大災害を、しかし私はこの田にじかに見るのはあるか、父や母がそうであったようにその当時の時代の空気をリアルタイムで感じ取れたわけでもないのである。

ならば一体何に思いを馳せ、何を思い浮かべ、そしてどのような感慨を持つべきだというのだろうか。

確かにそこにあるはずなのに、しかし見えてこない、その何か。もしかしたら私はそれをこの田に見れぬことを、妙な負い目のようを感じてしまっていたのかもしない。

慰靈碑への献花も終わり、全ての参列者たちが自分の席へと帰り着いていた。その折を見計つて蕭やかに告げられる、司会者の黙祷を促す声。

人々が各々深く思いを凝らす様子がひしひと肌に感じられた。

私もそれに従い目を閉じて、暗闇の中に再びその見えない何かを探し求めようとしていた時のことである。

「お前たちは！」

静寂を切り裂いて響く、悲痛な音色の叫び声。思わず振り向いていた私の視線のその先でなおも言つ その叫び。その問い合わせ。それを聞いた途端私は、だから思わずそれを自分自身へと向けられたもののように錯覚してしまっていたのである。

「分からぬのか？」

遺族席の後ろの方、一般参列者のいる辺りである。沈黙を一転、がやがやとぞわめき始めた群衆の中から一人、私と同じ年くらいの少年が姿を現していた。そして歩みを慰靈碑の方へ、まるで何物かに引き寄せられでもしたかのように進み出ると、指を虚空へ ち ょうじ慰靈碑の聳えている辺りである。そこへと向けて 、

「いるだろ？ そこに！」

彼は一体何を訴え掛けようとしていたのだろうか。

分からぬ 伝わらない。私たちはだから誰一人として彼のその言葉に応じることができずにいたのだけれど…… でも、当然いつまでもそのままというわけにはいかない。

「ちょっと、君？」

とつせのじとに思わず我を失つてしまっていたのだろ？ じばらく呆然と立ち尽くしていた司会進行役がしかし流石に自分の職務といつものを思い出したようである。

突然現れたその闖入者を排除すべく強い語調で呼び掛けつつも駆け寄つていったのだけれど、その手が肩へと触れるか否かのところであった。少年は体を翻し、すり抜ける そのままの勢いで更に歩みを重ねると、いつの間にやらこちらの方へと近づいて来ていた……、「え？」思わず困惑の声を上げてしまっていた。私のすぐ隣である。

祖母の座る座席のすぐ目の前に、なぜだろ？ ひどく苦しげな表情を湛えながらもその少年は立ち尽くしていく……、赤い夕陽に染まるその顔を、私はなぜだかとても綺麗なものだと感じてしまつていた。が、そんな風ないさか場違いな感慨もそのすぐあとには粉微塵に粉碎されていった。

「あんたは被害者だろ？ 十六年前の」

「え？」 今度は祖母の番である。數から棒の呼び掛けに呆けたような声を返すのだけれど、向こうはけじから返事などどうでもいいようだつた。

「なのにどうして気づかない？ あれが、本当に見えないのか？」

「ちょっとー！」

祖母の困惑などどうでもいいかのように一方的にまくし立てる少年に、流石に腹が立つた。私はだから横合いから一人の間に割つて入ろうとしたのだけれど……、「え？」

不意に力が抜けた。

いや、と言うよりもまるで体が見えない力に押さえつけられでもしたかのように急に重たくなつていて……、「澄美香？」思わず地面へと両手を着いていた私に母が声を掛ける。が、やはり少年はそんなことにもお構いなしである。

「よく見てみろ！ あれを！ あんたたちが招いたものだ！」

「君、いい加減にしなさい！」 ようやく駆け着けた司会役の男性に羽交い締めにされつづも、しかしその手はいつの間にやら祖母のか細い腕を掴み取つてしまつっていた。

「目を背けても消えはしない！ あれの名を、今こそ思い出すべき時なんだ！」

なおも叫ぶその不得要領なセリフをしかし、どうしてだろう。私はそのあとずいぶんと長い間記憶の中へと留め続けていたのだった。

「で？ 何なの？ それ？」

「さあ、知らない」

「知らないって……」

それはないだろうと言わんばかりであつたが、そんなもの私に聞

かれたところで困る。

「ささかぞんざいな調子にナコに答えると、田の前のケーキに更なる一撃を加え、切り取った断片を口の中へと放り込んでやる。と、甘やかな味覚が舌の上で蕩けた。

今は昨日の振替日として、記念すべき十六歳の誕生日をケーキ屋で祝つてもらつている最中である。

「大体そのあと聞いた話じやその子づきの町に住んでるわけじゃないらしいし」

「？その子？って、年下だったの？」と、これは七海である。

「分からぬいけど……、多分、自分よりは幼いように見えたがもちろん確信はない。

「なんにしたつてほんとに意味不明なんだから、言つてること、理解できた人なんていなかつたと思つよ？」

とはいえしかし、その言動はともかくとして意味不明と「付けてしまえないことが一つだけあつた。」「ただ……」

「ただ？」促すナコに頷いてそれを告げる。「その子に睨まれた途端に何だか急に体に力が入らなくなつちやつて……、私」

一体あれはなんだつたのだろう。と、これはもちろん私としては大面目な話のつもりだったのだが、「はいはい」余りにぞんざいなナコの返答と、七海に至つては露骨に田を逸らしていたりした。

「ちょ、何？ 真面目な話なんだけど」

「そりやあよかつたよ。澄美香にもよつやく春が来たかそつかそれによかつた」

「つてそうじやなくて」

「まあいいからさ。そういうことは何かもつと明確な進展があつてからにして下せー。で、今のでもう何だか渡したくない気分ありありではあるのだけれど、折角用意した私の気持ちが報われないのではいどつぞ」

なんとも投げやりな調子である。本来ならば心を込めて渡して欲しいところではあるのだが、この際もらえるのなら何でもよかつた。

「これはこれは」と、妙に恭しい態度で受け取るそれは、どうやら去年と同じく見慣れた口^コの紙袋である。願わくは中身まで同じではないことを祈りつつ中身を確認しようとしたところで、「はい、私も」と、続けざまに七海からもであった。

「いやー、悪いね」

多分二人一緒に買いに行つたのだろう。同じお店のものであるらしかつたが、こちらはナコからのものよりひと回り程大きかった。差し出されたそのプレゼントの包みを私はありがたく受け取ろうとしたのだけれど……なぜだろう。「あつ」思わず取り落としてしまつていた。その故を私はそのあとすぐに響いたナコの声に我に返りつつも悟っていた。「何？」

地震である。しかも結構大きい。私たちは各自言葉になるかならないかの擦れ擦れの声を上げつつも無意識に店の天井の辺りを仰ぎ見る。と、すぐ傍^{そば}にあつたペンドント型の照明がかなり大きく揺れていた。が、更にである。すでに限界まで振れていた振り子が強引に弾き飛ばされたかのように大地が揺れていって、「澄美香！」

気づけば一人はすでにテーブルの下へと避難していた。私も呼び掛けに応じてすぐさま体を滑り込ませるのだけれど、流石に三人が入ると中はぎゅう詰めである。どうにか頭だけは完全に隠すことができたものの、背中は半分外へと出てしまつていた。そんなような状態で私は一体どれくらいの間そうしていただろうか。恐る恐るという風にナコが聞いてきた。

「やんだ？」

「ん……、かな？」

「大丈夫そう」そういつていち早く外へ出たのは七海である。「大丈夫？」ナコがその様子をテーブルの下から窺いつつ聞くが、返事を待つまでもなく自分も外へと出る決意をしたらしい。おつかなびつくりという体にはい出してくる。

私はといえばすでに天井に揺れる照明を見上げながらテーブルの傍^{そば}へと立っていた。が……何だろう。この胸騒ぎ。胸の奥底が何だ

かそわそわと落ち着かなくて、私はビビりやうじぶんと普通ではない様子をしてしまつていたらしい。

「澄美香？」

ナロの心配氣な声になつとなる。や否や、それをまるで合図にしたかのように私は制服のポケットから携帯を取り出すと、初めはメールを、しかしすぐにそれよりはと思い直して直接電話を掛けてみることにする。が……、呼び出し音が一回、一回、三回、四回……、まだ出ない。焦れてディスプレイを見る。が、それでもまだであった。

祖母の携帯へと掛けた電話はしかし一向に繋がる様子がなくて、私は氣がつけば座席の足元に置いておいた鞄を引ったくるよつこじて手に携えていた。

「ちょっと澄美香、プレゼントはー？」

「ー」めん、あとで連絡する

もう自分でも一体何をそんなに焦つているのか分からなかつた。けれどその時の私の脳裏には昨日のあの少年の横顔と、そしてそれに怯える祖母の姿が嫌に鮮明に映し出されてしまつていて……、慌てた調子のナロの声を振り切るように私は、折角のプレゼントと二人を残してその店から飛び出してしまつていたのだった。

学校からも程近いその店から駅までは歩いても十五分くらい。本気で走れば五分である。私は肩で息をしながらも折好くやつて来た電車へと飛び乗ると、倒れ込むよつにして座席へと腰を下ろしていた。

どん、どんと、心臓の音がまるで荒々しいノックの音のように胸の中に響く。おもむろに動き出した車窓の景色が思いなしかつもよりも遅いよつな氣がして、私はひとり得も言われぬ焦燥に駆られていた。

果たして大丈夫なのだろうか。

その安否が気掛かりで、一秒でも早く無事な姿を確認したくて……でも、どうしてだろうと、ふと自分自身の思いに首を捻る。だって考えてもみれば私の逸る気持ちの行く先はそうあの祖母なのである。

十六年前の大震災からこの方、人一倍地震それに対する備えを万全にしてきたはずの人物。

だから彼女の部屋はもちろん私たちの住む家にあるあらゆる家具という家具は壁にしつかりと固定されていて、家自体もそうだった。それは近所のほとんど全ての家屋がそうであるように、決して先程の地震程度で問題が起こるような代物ではないはずなのである。なにどうしてだろう 私の心は不安で千々に乱れ、それからバスへと乗り継ぎ自分の家へとたどり着くまでに感じた時間の経過は、何だか途轍もなく長いもののように感じられたのだった。

見慣れた停留所へと転がり出るよう降り立つと、そのまま息も吐かずに坂道を駆け上がって行く。路傍に自生している菜の花が今正に見頃という状態を迎えていたが、もちろんそんなものに目をくれている余裕はありはしなかった。

私は息急ぎ切りながらも低い生け垣に囲われた我が家の姿を確認すると、郵便受けの脇にある玄関まで続く小道へとようやくたどり着いていたのだけれど 足は、目的地に到着する前に動きを止めてしまっていた。

なぜならすでにもう目的を達してしまっていたからである。

「おばあちゃん！」

向かう先、視線のその向こうへ、玄関の前で祖母が倒れているのが見えた。

いつになく静まり返った家の中で、玄関の辺りから聞こえてくる

その声は嫌に耳に鮮明だった。

それでは大事に」と、穏やかな調子に告げるのは近所に住む開業医の先生である。その声に応えるのはこちらは母。ありがとうございます」と、どこか懺悔でもしていいるかのような暗く、そして重いそれは口調であった。

玄関のドアが閉まる音がしてからしばらくして、一歩一歩と足音がやつて来る。

「澄美香」祖母の血塗。襖を開けて、家で唯一の和室であるやぐと母が顔を出す。

「もう大丈夫だから。あんたももう……」

「仕事」

「え?」先程までひどく苦しげだった祖母の顔は、今はもう安らかな寝息に彩られていた。その様子を枕元で眺めながら私は言つ。「仕事……、大丈夫だつたの?」

「あ、ああ……」何だと、まるでとんでもない聞き間違いでもしていたかのようだった。ほつと胸をなで下ろすような様子に答える。「大丈夫よ。今日は別にそれ程忙しくなかつたから」

「そう」それなら良かつたと続けようとして、でも実際には言葉がなかつた。代わりに祖母の顔を熟々と眺めつつ、「でももう少しだけ……」と、自分の方から脱線させた話を元に戻す。

「分かつた……けど」飯くらい食べなさいよ? ちゃんと用意してくから

「お母さんも」

「当然、もうお腹ペエペエ」そう言つて満面の笑みを浮かべる彼女はなんというか、我が母ながら相変わらず敵わないと思わせる。

「それじゃあね」

「うん」襖を元通りにぴたりと閉めてリビングの方へと去つて行く母の足音を聞きながら、私はけれど彼女のように笑うことはできなかつた。

だから他にどうしていいのか分からなくて、再び祖母の顔へと視

線を戻す　　と、うつと、少しく開いた口から掠れた声がこぼれていた。

「おばあちゃん？」多分起きたわけではない。だから私はつぶやく。よつな微かな声で言いつつその寝顔を見守るのだけれど、その次の瞬間、まるで心臓を驚撃みにでもされたかのような衝撃を受けていた。

「あなた……」

きつと夢の中に現れた人物に呼び掛けたのだろう。その寝言は、しかしにわかにはいつもの祖母がつぶやいた言葉だなどとは到底信じられないような音色で私の耳には届いていたのだった。

医師の話ではそれはそこまで心配するようなものではないという。原因是恐らく心因性のものだろう。でもその日を境に祖母はほとんど寝た切りの状態となってしまっていて、しかもそれだけには留まらないのであった。

それから一日が過ぎ、一日が過ぎ、やがて一週間が経とうとしていた頃になると、もうその手の話は耳に胼胝たこができるという程にである。聞こえてくる噂話に鑑みるに、どうやらそのような異変はひとり我が家に限つたことではなかつたようなのであった。

今から十六年前、当時ここで例の震災を体験した人たちが挙つて体調不良を訴えているというのである。町はにわかに　しかし隠然と、不穏な空氣に包まれ始めていた。

「……つていう話らしくってさ。もしかしたらなんだけどその子なんじやないかなあって……、澄美香？」

「え？　何？」すっかり上の空であった。机の上に突いていた頬杖を外してナコの方を見ると、そこには話を無視されて憤然　といつた表情ではなく、すこぶる真剣な調子の憂い顔があつた。「大丈夫？」心底こちらのことを気遣ってくれている様子である。

「うん……。」めん。ちょっと考え事

「そつか……、いや、こっちもそんなに大した話じやないからせ」

終業式も間近に迫り、今日も短縮授業である。あとは担任の到着を待つて下校となるばかりの解放感漂う教室の中で、しかし私の心は一向に晴れる気配がなかつた。

いつもならば寸暇を惜しんでのおしゃべりとなるはずが、どうやらナコに一方的に喋らせてしまつていたらしい。未だ現実感のない意識のまま謝罪の言葉を口にしたのだけれど、「ただこの前言つてた男の子らしい人物をうちのお姉が見たつていうからさ」「だからと、ナコは何やら気になるセリフをこぼしていた。

「男の子？」

「ほら、この前言つてたじやん。慰靈祭に乗り込んできたつていう」「ああ」あの少年と、脳裏にあの日の光景を思い浮かべてみる。そうだつた。考えてみればあれが始まりだつたと言えないこともない。そのことに気づくと私は何だか急にその彼の存在がひどく重要なことのように思えてきて……、「え？ 何？」無意識にナコの腕を掴んでいた。

「教えて、詳しく」

去年の春に短大を卒業し、それからというものの地元の図書館で司書をやつてているナコの姉が言つには、その少年——ここ数週間の間毎日のように通つてくるのだという私たちと同い年くらいの男の子は、どうもこの町の住民ではないようなのである。

なんでも閲覧する本という本が地元の郷土史やら何やらで、明らかに部外者の立場でこの町のことについて色々と調べているものらしい。

そしてどう見てもまだ中学生か高校生くらいの年頃であるにも関わらず、平日の昼間から入り浸つてているのだという その話を聞

いて、私はなぜだか確信してしまっていたのだつた。その彼こそがそう、あの日祖母の腕を取つて訳の分からぬ何事かを叫んでいた少年に違いない と、そう思い込んでしまっていた私はだから、その日の内にその市立図書館 学校から更に電車で一駅向こうへと行つた先にある近辺でもかなりの規模を誇るものである ナコの姉の勤務先へと足を運んでいたのだった。

普段中々来ることのない場所なので少々まじつきつつも中へと足を踏み入れる。と、ぱつと見にやはり人はそれ程多くないようである。

恐らくは休日の方が利用者は多いのだろう。閑散とした館内を奥へ奥へと進んで行きつつ書架の間へと素早く視線を走らせていると、ふと目の中に飛び込んできた映像に私は足を止めていた。

遙か彼方、二つの書架の谷間が作り出す一本道のその果てに、閲覧の便に供するためにであろう 用意されていた長机と椅子が見えた。

私は弾かれたようにそちらへと進路を転じると、初め歩調は先程よりも速く、しかしぬるべく緩やかに、まるで餌を啄む小鳥を後ろから捕まえようとでもしているかのような慎重な足取りで近づいていくと、最後にはもうほとんどじり寄るような調子にである 歩を進め、そしてじくじくと思わず息を呑む。視線の先、すぐ目の前で、やはりそうである。その少年、あの日見た彼がひたと視線を手元の本へと向けていた。

「あ……」我ながら情けない声だと思った。調子外れのひと声を上げてから、「あの……」と、今度はやや取り繕つた声を掛ける。が無言。まるで聞こえてはいらないという風に机の上に広げた本のページを捲つている。なのでもう一度、「あの、ちょっと、君」今度は更に声量を上げての呼び掛けである。そこでようやくページを繰る手が止まつたと思いきや、まるで親の仇でも見るかのような鋭い視線。上目づかいでこちらを見すえながら彼は短く端的に言つた。

「誰？」

一瞬怯むも素早く答える。

「私は愛沢澄美香。すぐ近くの高校の生徒で、あなたとは前に一度会っている」

「そう?」興味がないとばかりに肩を竦めつつ、早くも視線はもう本の方へと戻つてしまつていた。

「憶えてないの?」

「生憎」全く残念でも何でもなさそうに答えるが、その素つ氣ない態度が私の気持ちを逆に落ち着かせていた。「震災記念田の日、いたでしょ?」君、慰靈碑広場に」

「ああ」そういえばと、本当にどうでもいいことのようになつた。「

それで?」

「え?」

「だからそれで? 僕に一体何の用?」

そこでようやくであった。言われてはたと気づく。確かにそうだ。そもそもがどうして私は彼を探そうとだなどと思い立つたのだろう。何とも間抜けな話ではあるのだが、私はそこで初めて自分の感情の部分と論理の部分がひどくちぐはぐなことになつていていたのであった。思わず呆然とその場に立ち尽くす。が、それでもと、事ここに及ぶと私は何だか妙に開き直つたような気持ちになつていた。

氣を取り直すと目の前の座席　　彼の対面の席へと腰を下ろしつつ言つ。

「私の祖母が倒れたの……。一週間くらい前に、大きな地震があつたでしょ? それからずっと調子が悪くて……でもうちだけじゃないの。町のお年寄りで震災を経験した人はほとんどがそう、原因不明の体調不良に見舞われてて」

「で?」まるで氣のない返答に今度は鼻白んだりはしない。

「君、言つたよね? あの時、『分からないのか?』って。それでこうも言つた。『名前を思い出せ』って。あれは一体」

何のことだったのかと、そう問い合わせようとした言葉の先を封じ

るかのようだった。ぱたりと、些か乱暴な音と共に本が机の上で閉じられる。

「それが君と何の関係があるの？」

「言われば正論。けれどここまで来たらもう引き下がるわけにもいかない。」

「正直なところを言えば私にもよく分からぬ。けど私はどうしても今この町で何かが起こっているようにしか思えなくて……」「それで？」挑み掛かってくるかのような視線にこちらも負けじと見つめ返す。

「もしかして君はそのことに何か関係があるんじゃないの？」

もちろん根拠も論理も全くないただの憶測であり、いつそ妄想とさえ言えるようなそれは問い合わせだつた。けれど少年はそれに笑うことはず、むしろ先程までより幾分真面な態度になつたような気がした。指を表紙に這わせていた本を脇へと押しやると、今度は真っ直ぐこちらを見すえてくる。

「君は今、この世界で一体何人の人間が餓えに苦しんでいると思う？」

「……は？」流石に反応が一拍遅れた。だつて余りに唐突なのだ。思わず鼻白む私に彼は頓着なしに更に言つ。「では今現在、常態的な内戦状態にある国の数は？」

「……さあ」さつぱりである。それはもちろん質問の答え自体もうだつたが、そんなことを今問つてくる彼の意図そのものがそもそも不可解であつた。

「それが一体今の話と何の関係が？」

「ないよ？ でもそれは君がさつき言つたことにしてもらおう。今この町で何が起きていいよとも君には関係がない。それは今から六年後にこの場所で起こつた震災についてもそう。君とそれら問題の間には理解の面や時間的な面において心理的な距離があるのだから。なのに君はどうしてその特定の問題に対しても立ち入る意志を示し、けれどさつき言つたような世界の問題に対しても関知しよう

としない？」

「それは だつて」

「身近な問題だから？ ではその線引きは一体どこでする？ 」この町で起ころる問題が君にとつての問題だとこうのなら隣町で起ころる問題は？ 君の問題？ だとしたらその更に隣町で起ころる問題は？ それも君は自分の問題だと言つつもり？」

「ちょっと 、待つてよ。なんで今そんな話」

「君が始めた話だよ。個人と社会の問題についての話だ。僕とこの町の問題に何か関係があるのかと問われれば答えはイエスだ。けれどそれは今言つたような線引きの問題で幾らでも無関係といつことにもできる。だから君にも聞いているのさ。君にとつての問題の要件とは一体何であるのか、と」

「要件？ そんなの自分がどうにかしなきやつて思つ」と決まつてゐるじゃない」

「なら君は今この世界で起きている他の様々の問題は別段解決する必要のないものだと考えていいとこう」と？

「いい加減にしてよ」

もちろん声は低く抑えていた。けれどそれなりに周囲に人がいたならば強かに非難を蒙つてしかるべき声量ではあつた。なにせここは図書館なのだ。

私は波立つた胸をなだめるように息を吐くと、我ながらまるで言い訳のようだと思った ひどく苦々しい調子に自己弁護の言葉を口にする。

「そりやあ私だつて自分に何か力があればそういうことをどうにかしたいとは思うよ？ けど無理でしょ？ だつて私には何の力もない。ただの高校生なんだから」

だからと言つつも私は、しかしてつくり先程までと同じく即座の反論があるとばかり思つていたのだ。なのに今度は嫌に静かである。どうしたことかと妙な不安に苛まれていると、彼は何やら驚きに見開いたような目で私を見つめていた。

「君の名前が分かったよ」

「はい？」思わず調子外れの声を漏らす。だつて今更であった。一体何を言つているのだろうと訝るも、向こうは先程までのどこか不真面目な態度をすっかりと脱ぎ捨て、今やその瞳には微かな怒りの色さえ感じられる。

「盲目の求道者……。それでは目がよく見えないだろう？」

「え？ 一体何を言つているのだろう。流石に怯むがそんな私の心の動きを機敏に察したかのようだつた。機先を制するように音もなく立ち上ると、彼は机の上に身を乗り出してこぢらへと迫つてきていて……、「ちょっと、何？」

「動くな」

あの時と同じだつた。いや、或いはそれ以上だつたかもしれない。あの日、慰靈祭での邂逅の時と同じように私の体は全く自由が利かなくなつてしまつていて、まるで金縛りにでもあつたかのよう。ただただ目の前で進行する状況を無抵抗に受け入れるしか術がなかつた。そんな私の額に彼のその冷たい指先が触れる。

「アポロギア、君にこの世界の本当の名を教える

そして世界は暗転する。

目を覚ますと時刻は最早夕暮れ時であつた。

居並ぶ書棚のその上、壁面の高い位置に並べられてある採光窓から注ぐ陽光は、たつぱりと濃い紅を帶びていた。

私は突つ伏していた硬い木製机の上から顔を上げると、静寂に包まれている辺りを見回してみる。が、誰もいない。

恐らくはもう閉館間際という時間なのだろう。書架の前に立つて目当ての本を探しているような人物も、椅子に座つて調べ物に勤しんでいるような人間も誰もいない。だから私もどこかその光景を夢の延長線上のようなものと勘違いしてしまつていたのかもしれない。

が、当然そのような錯覚がいつまでも続くわけがなかつた。

「え？」

思わず声を上げつつ立ち上ると、田の前の席を確認する。がしかしれない。

そこにはつい先程まで私と言葉を交わしていたはずの少年の姿はない。しかもその？つい先程？というのも實際にはどれくらい前のことであつたのか判然としないような状況である。

「夢……？ なわけないか」

ひとり言にその可能性をつぶやくも、流石にそこまでを疑うのは考え過ぎなような気がした。私は首を捻りつつもその場から立ち去り、来た時よりも更に閑散としてた館内を出口まで急ぐ。恐らくはもうあの少年はここにないだらうし、何より妙な胸騒ぎがしてならなかつた。

だから私はまるでそそくさと逃げるよつにそのまま市立図書館から足を外へと踏み出していたのだけれど、自動ドアのその向こうへ。夕闇暮れに届い景色を目の当たりにした時、私は思わず手にしていた鞄を取り落としそうになつてしまつていた。

「だつて……」「何？」「これ」

付近はなだらかな丘陵地帯の上である。玄関前に設けられた広場のその向こうには延々と下つて行く地平があり、そしてその更に向こうには微かに見える太平洋の水平線と広大な空。暮れ残る光をうつすらと点すのみの藍色のスクリーンが広がつていて……でも、そこには未だかつて私の見たことのないような異様な姿の生き物が、その不気味な姿を無数に点在させていたのであつた。

その余りに非現実的な光景に思わず息を呑む。と、そのままをあたかも嘲笑うかのようである。

「見えるかい？」

気づけばすぐ近く。広場の一画に植えられていた樹木の陰からあの少年が姿を現しつつ私に語り掛けてきていた。

「初めて見ると正直不気味だらう？ あんなもの

どんな生物図

鑑にも載つていないんだから。でも見慣れてくると案外可愛氣があるものだよ」

「冗談じゃなかった。可愛氣？ だつてあれは……今私たちの田の前にあるものはまるで生物の教科書で見たよつた浮遊生物 プランクトンのなりである。半透明の体の中に時折きらきらと光る粒子のよつなものを孕んでいて、その動きは至つて緩慢。意思があるようでない。ないようである。ただただもう不氣味としか言つようのない代物なのである。が、もちろん今はそうではなかつた。問題なのはそんなことではなく、そもそもの話である。

「な……、何？ あれ」からからに渴いた喉からりよつやくそれだけの言葉を絞り出すと、彼は事もなげに答えた。

「あれは陰陽思想で言つといふの陽の氣、魂魄一極の魂を成すものにして破壊衝動に内在する再生の願望、理想化された女性像、つまりはアーマ……。僕は『てんせいぎょ転生魚』、或いは『レーテの魚』と呼んでいふ」

全く話についていけない私を、しかし彼はまるで弄んででもいるよつである。満面の笑みを浮かべて言つ。

「ようこそ、眞実の世界へ」

きつと私は夢を見ているのだろう。けれどその夢はどうして妙にリアルな感触で、醒めるはずの夢がしかし醒めないものと知つたのは、それからしばらく経つてからのことになる。

「今君の田の前にあるのがこの世界の本当の姿だ」
世界は多分、とんでもなく理不尽だ。

第2話 「イエローガーデン（後編）」（前書き）

本作は架空の大震災・大津波の被災地を舞台に取っています。

実際に何らかの災害の被害に遭われた方や関係者の方の中には、或いは作中での災害の取り扱いに不快感を覚える方がおられるかもしれません。

お読みになる前に以上の点をどうかご確認お願い申し上げます。

目を開くとそこには紛れもない現実の世界が広がっていた。
見慣れた天井を仰ぐ視界にはもうどこにもの不気味な浮遊生物
のようなモノは浮かんではおらず、世界は至って平穏である。

私はおもむろにベッドの上へと上体を起こすと、ゆっくりと深呼吸。それから視線を左の方 今や日映ゆい朝日^{フランク・トーン}の光に満ち溢れているに違いない 屋外^{そと}の明かりをうつすらと零しているカーテンの方へと向けると、ゆっくりと立ち上がる。と、にわかに不安が胸の中に兆した。とは言えよもやそのままここに立ち尽しているわけにもいくまい。

私は意を決したように窓の方へと向かうと、再び大きく深呼吸。目を閉じて心を落ち着かせると、意を決して目蓋を開くのと同時、思い切りよくカーテンを開け放つていた。

もちろん、そこに昨日の朝と同じ現実を期待して……。

「今日学校休もつかな……」

ひとり言めかしてつぶやいたセリフはもちろんただのひとつもりはないようである。

「いいから早く食べなさい。遅刻するわよ？」「だからあ……」

コーンスープを掬つていた木の匙を置いて、今度はもう直接相手の顔を見て訴え掛けるのだけれど、もちろん我が母がそんな安手の

お涙頂戴に乗つてくるはずもなかつた。

テーブルの上にサラダを置くと、このひらの言ひ分など——つとも聞く氣配もなくさつさとキッチンの方へと戻つて行つてしまつ。なので私はもう大仰に天井を振り仰ぐなりああと最早この世の終わりを目前にしたかのような声を上げるしかないのであつた。

何だかもう食欲も出ない。

「「こちそーをま」私はまるでため息でも吐くかのよつに言つと、嫌に耳に能天気に響くテレビの音を背にして席を立ち上がる」と、「え？ 何……まだ残つてゐるじやない」当然のように母がキッチンから顔を出しつつ言つた。

「いい……、もう」何を言つても無駄なのだ。不貞腐れたよつに私は席から立ち上ると、引きずるよつな足取りで廊下へと向かう。そして置いておいた鞄を持つて、一路玄関へ ではなく、奥の和室の方である。憂鬱な足取りを向けて、でも声だけは努めて明るくした。

こつこつと、襖の桟を拳の背で叩いてから言ひ、「おばあちゃん。

行つてきます

もちろん起きてない場合もある。故に毎回ひかえ田な調子を心掛けつつあいさつの言葉を述べるのだが、どうやら今日は大分具合がいいようであった。襖の向こうからはいつにない張りのある声が返つてくる。

「行つてらつしゃい」

何だかひどく救われたよつな気分だつた。だからもう一度、今度は明確に相手に告げる口調で言ひ、「行つてきます」

出発のあいさつを述べると今度こそ、私は意を決したよつに深呼吸をひとつしてからその歩みを玄関の方へと向けて、そのままの勢いで外へと飛び出していこうとしたのだけれど、やはりこのドアを開くといつ段になると腰が引けてしまつていて。

だがもうこれ以上祖母に不安な思いをさせるわけにもいかない。

私はひと時の逡巡を振り切ると、まるで地獄へと続く門を開くよ

うな気持ちでその重く閉ざされたドアを外へと押し開いていたのだった。

ふと思つ。

確かに感覚質^{クオリア}……と言つただろつか。個人が外界からの刺激によつて得る主観的な質感のことを 確かそのように呼ぶのだと誰かが言つていたような気がする。

それは現代科学の難問の一つであり、個人の主観という場を離れては明確に説明できないものなのだという。とすればである。或いは今私のこの目に映つている世界のありさまもまた現代科学の難問の一つに数えてもいいということなのだろうか。

ふとそんな風な馬鹿氣た考えが頭の中に浮かび、まあまあやはり馬鹿氣た話だと自分自身で嘲笑つてやつた。だって これである。私はバス停までの坂道を下つてゆきつつ視線を左の方へ。眼下に続く斜面のその果てに広がる一面のソーラーパネルと菜の花の群生を横目に見て取る。と、田の中に飛び込んでくるのは見慣れたはずの、しかし見慣れない光景。

空闊^{くうかつ}として豁けた大地とその上空に乱れ飛ぶ、不要の夾雜物^{せらう}。

今やあれ程に親しみ深かつた我が町の風景は、さながら異界からの侵略を受けてしまつてでもいるかのよう 何とも異様な生物じみたモノに空を埋め尽くされてしまつていて、在りし日の面影すらない。

まさかこれを科学の範疇でどうできるなどとは流石に私自身思つてはおらず、だから昨日のあれから今に至るまで、もうほとんど頭がどうにかなりそうな混乱の渦中にいたにもかかわらず、私はそのことを他の誰にも話すことができずにいたのであつた。

何せそう バスはいつも通り。世界がこんな風になつてしまつたにもかかわらず平然とした顔つきで時刻通りにやってきて、私を

乗せると駅へと向けて走り出す。なのにそう 周囲にいる他の乗客たちはただのひと言もそのことには触れず、剩え見向きもしないのであった。ならばこれはもうそのことの証左に他ならない。

どうやら彼 昨日のあの少年が言つていたその「てんせいぎょ転生魚」或いは「レー・テの魚」、今も車窓の向こうで揺ら揺らと大挙して浮かんでいるそれらのモノは、普通の人々には見えないようなのである。

なのにどうしてそれを軽々に訴えることができるだろうか。

精々熱があることを疑われるか、悪くすれば本氣でその手の病院に連れて行かれるかもしれないのである。私は他に致し方なし、自分の頭と世界のどちらが狂つてしまつたのかを詮索する思考を一旦放擲し、こつして今の今までこの異常事態と何とか折り合いをつけたのである。が……、バスを降りて電車へと乗り替える。そして学校の最寄り駅へと到着し、いつもの通学路を他の生徒たちに混じつて歩いて行く内に、やはり私は確信していた。

昨日あれから家にたどり着くまでも何となく感じていたことはあるのだが、それらのモノはどうやら周囲に人が増えれば増える程にその数を増やしていくものらしい。

そろそろ丘陵地帯の上の更に小高い一画に聳える私たちの学校の姿が見えてくるといつところである。運悪く信号に引っ掛けたのだけれど、その頃にはもう周囲は通学途中の生徒たちでいっぱいであつた。が、ふと視線を上げて眺めてみると、そこにはもうほとんど私たち人間の数にも負けず劣らずといつようなくらいであつた。のつそりと、ゆつたりと、まるで海中に漂う浮遊生物の体（プランクトン）でさ迷いながら、それらのモノは空一面を埋め尽くすように浮いていて、時折その半透明な体を揺り動かすように場所を移動する。と、何匹かがパクパクと口と思しきものを機敏に動かしていた。するとまるで餌を飲み込んだかのように体の中にきらきらと光る細かな粒子が散つていて、やがて消える。と思いきや、また再び何かに反応したかのように場所を移動してはパクパクパクパク、盛んに体の中に光る粒子を取り込み続けている。私の目にしか映らないこれらのモ

ノは一体何なのだろうか。

赤信号に足止めを食らい、ふと何やら沸々と込み上げてくる怒りに放擲していた思考を思い出し掛けたその時である。いやと私は心中で首を振っていた。

そう 私だけじゃない。もう一人いるではないか。

昨日体験したあの異常な出来事が脳裏に鮮明に蘇る。と、最早怒りは抑えなど利かなかつた。私はまるでハツ当たりでもするかのように憎氣の視線をその浮遊生物たちへと注ぎつつ、あの少年への憎悪を更に更に深くしてゆく。と、不意にその中の一匹がまた何かに反応したようである。

ぴくぴくと体を震わせたと思いきや、感情のおよそ読み取れないその顔とおぼしきものをぴたりとこぢり 私の方へと向ける。と、「え？」私は思わず驚きの声を漏らしてしまっていた。

だつてそれまでのおつとりとした仕種が全くの嘘であつたかのような機敏な動きである。忙しく体を震わせつゝも周囲の個体と同調するや否や、それは瞬く間にも私の元へと迫り来していく、「や！」まるで水な面の餌を奪い合つ鯉の群れのよう。しきりに私の皮膚を啄んできていた。故にそれらのモノから私はとつさに逃れようとしたのだけれど、すでに視界はすっぽりとその異様の生物たちに取り囲まれてしまつていて、だから当て所もなくただスペースのある方へと踏み出されていた足は、私を白と黒との縞模様の上へと誘なつかシヨンの轟音を轟かせていた。

「夢……見てるの？」私「自らの瞳の映すものを信じられずに私は独り言ぢる。

「いいや、現実さ」けれどそれを冷淡に、しかしどことなく悪戯つ気さえ感じられるような声で否定する彼。でもそれなら一体何だと

いつのだろう。今日の前にあるこの光景は……。私は図書館から出てきた途端に豹変してしまった世界をただ呆然と見つめるしか術がなかつたのだけれど、「テオーリア」「え？」またも効き慣れない言葉である。私はもうほとんど条件反射のように聞き返していた。

「古代ギリシアの哲学者、万学の祖として名高いアリストテレスの説によれば、人間の理性的活動の最高位とはその外界観察作用にあるという。テオーリアとは觀察の意。英語のセオリー『理論』の語源である。もちろんそれは単純に肉眼による姿形の把握のみには留まらず、物事の本質へと至る思索的側面をも含めて言つが……早い話、日本でいうところの『心眼』だ」

けれど今度はもう言葉もない。ただでさえ混乱しているというのに、彼は一体何が目的だというのだろうか。呆気に取られる私にしかし優しい解説など付け加えるつもりは毛頭ないようであった。

暗い薄闇の中、夜闇へと没し掛けた東の空を眺めつつ更に言つ。「今や君はそのテオーリアに目覚めてしまつたんだよ。幼児がふとした切つ掛けで死という概念に気づいてしまつたように……、或いはそれまで絶対だと信じていた現実がただの欺瞞に過ぎないと分かつてしまつたように……、僕がそうした」

「何……言つてるの？」最早呪文である。それはただただ無意味に鼓膜を震わせるだけの音の羅列に過ぎなかつた。にもかかわらず、更にはその行動までもが奇異へと赴く。

「君がそう望んだからさ。だから教えてあげたんだ。この世界の本当の名前をね」

彼は右腕を目の前へ 私の方へと翳し、手のひらを下へ、まるで操り人形へと繋がる糸を吊り上げるかのような仕種で等分に開いた五本の指をピンと張り、そこに見えない力を籠めるようにして……、「それでもう一つ」困惑に眉を顰める私の眼前で、それはまたしても私の常識を覆す光景。「何……？」

彼の足元、レンガ敷きの地面からそれらは「」とり、各自納められ

ていたスペースから抜き取られ、浮き上がり、翳された彼の手の周辺でふわふわと漂い始める。

「この世の万物には全て真実の名前 イデア が存在する。それはそのものの真の姿であり、またその存在そのものを規定する鍵でもある。だからそれを知ることは取りも直さずそれらのものの命運を握ることに他ならない。ちょうどそれは日本に古来伝わる言靈信仰のように……」

「コトダマ？」最早頭は真面な思考を巡らす用を成してはくれなかつた。私はただただ催眠術にでもかかつたようなあやふやな意識のまま、全くの無意味に彼の言葉をオウム返しにつぶやく。と、そんなん私の反応を彼は一体どのように感じていたのだろうか。

「言は事なり」

まるで意に介さないその様子から推すに、或いはどうでもよいことだと思っていたのかもしれない。

「我々の紡ぐ言葉とは常に事実に先んじて存在している。にもかかわらず、ともすれば事実を言葉が追従しているように思つのは、そこに無意識の自己欺瞞が存在しているからだ。人といつものほどかく『あるべき姿』に『あつて欲しい姿』を優越させることができない。故に世界は固定化し、人は自らの意志の力を無力と断じてしまう。が、その無意識の自己欺瞞を打破する術もまた我々は持ち合わせている。それが テオーリア 。我々は真実の目によつて世界を捉え直すことによつて、万物がその内にふくみ持つ『真のあるべき姿』 イデア に気づき、以て対象を最初の姿より解放する。それはつまり……」

それまでぴたりと宙空で止められていた彼の右手のひらがくるり、まるで水道の蛇口を捻るように翻される。と、それまでふわふわとただ浮いていただけだったレンガたちがその動きに呼応したかのように小さな円を描いてくるくると回り出す。そのままさながら円舞を踊るよう。

「意のまま、望むがまま、世界をこの手に握る」と等しい。そし

て……

ぴたり、再びレンガは動きを止めて静止する や否や、一直線にである。

「え？」条件反射に驚きの声を上げる私の元にそれら浮遊するともすればそう 凶器ともなるに違いない、今やつぶてと化したレンガが迫り来ていって、「きや！」

ひゅんと、風を斬る音が耳元で数回したと思いきや、がこんと、何だか余り耳馴染みのない音が背後から聞こえてきた。なので恐る恐る振り返つてみると、「嘘……」

玄関ポーチの柱部分である。堅いコンクリート製の円柱の下に、粉々になつたレンガの残骸が無残にもこぼれ落ちていた。

「ちょっと、冗談……でしょ？」

だから私は至つて当然の反応をしたつもりだった。だつてこれはどう見てもそうである。悪ノリというやつだった。なのに振り返つた私の目の前には再び地面から抜き出したのだろう 新たな凶器を周囲に浮かべている彼の姿があつて、

「イデアとは万物に隠された真実の名前。故にもちろんそれは人間そのもの あらゆる個人の一人一人にもまた存在する」

「や！」

今度は大きく体を前へと屈み込ませる。が、きわどさではさつきといい勝負であった。すぐ頭の上を一瞬の内にレンガが走り去つていくのを感じ、私は流石に血の気が引いた。

よもやこれは一刻の猶予もない状況というやつではないのだろうか。私は今更のように察すると、形振り構わずその場から走り去ろうとするのだが……しかし、

「つまりは君 盲目の求道者。君自身もまたそのイデアによつて規定され、特徴付けられた一つであるということだ。だからそのイデアを知りさえすれば君をテオーリアに目覚めさせることも、或いはまた 横目に捉えた彼はすでに次弾の補充を完了してしまっていた。故に弾丸は寸時ためらいもなく私の横面に向けて解

き放たれていて　　その瞬間、私は一体何をしたのだろうか。

思い出してみると記憶は定かではない。けれど肉薄するレンガの硬質な質感が網膜に焼きついて、次の瞬間にはほぼ確実に起ころうとする自らの負傷に対する苦痛を想像した時、私の脳裏には今と同じである。断片的な言葉がいくつも閃いていて　　それは、どこか遠い世界から響いてくる音のようにも思われた。

「あんという、耳を劈く大音響。

けれどもちろんそれは幻聴ではない。現に今私の目の前にはクラクションを盛大に鳴り響かせながら迫り来る大型トラックの姿が大写しになっていて、やはりそうである。あの時と同じ。一刹那の内にも脳裏には様々な言葉が閃いていて、これはそう　　、圧倒的な質量と、そして重量。

轟音を轟かせつつも回る車輪に導かれ、進むその体を自身ですら容易には押し止めることができないに違いない　　、その他律の機械。対抗する力の不在によってはどこまでも永遠に転がり続ける運命にあるのだろう　　、空転する足をただひたすら前へと踏み出し続ける、空回りの車輪。

ふとそんなふうな言葉が脳裏に閃いた瞬間、目の前に翳した両手のひらの向こう側でがこんと、曰く言い難い音が木霊していた。そしてやはりあの時と同じである。

どうしてか、いつまで経つてもこの身を襲うはずの脅威はしかし実際には襲つてはこずにして　　、あの時彼はこう言つた。

「アポロギア　　イデアによつて対象を自在に操る力。それに目覚めさせることも可能……ということだ」

それはあたかも永遠にも等しい時間。けれども実際にはほんの数秒だつただろう。私は荒い息を吐きつつその場に立ち尽くし、恐怖に萎縮した両手を中々目の前から下ろすことができずにいた。けれどもにわかに周囲の人声が活気付き、私を気づかうような声すら混じり始める。流石に我を取り戻すより他ない。

私は両腕の構えを解いて、改めて目の前の光景を確認する。

そこには果たして止まるはずのないスピードで迫り来ていたトラックが、しかし実際にはぴたりと足を止め、刹せ、もしもそうなつていなかつたのなら私の体の方こそがそつだつただろう。すぐ目と鼻の先、あと一歩前へと足を踏み出せばその中にすっぽりと体が収まつてしまつような距離にである。まるで巨大な鉄球を打ちつけられでもしたかのように実に奇麗なクレーター形を凹ませられてあつて……、

「おめでとう。これでもう君はただの高校生ではなくなつた」

最後に彼はそう言つた。言葉が嫌に執拗に耳の奥に木靈していった。

「最早世界は君の手の中だ」

多分あの時、図書館で意識を失つた時である。

「アポロギア……、？自叙伝？　か」

私は目の前に広げた分厚いギリシャ語辞典のと或る項目に目を落とすと、ひどく憂鬱な聲音でそつぶやいていた。

つまりは主觀に基づく記録。「何でもあり」ということだらうか。手持ちの英和辞書ではどうにも要領を得ないので、本格的にその意味を探るべく学校の図書室へと私はやつて来ていたのだが、それは考えてみれば当然のことであった。その意味が分かつたといで実際問題何の解決策にも繋がるはずがない。

私は投げやりな調子に辞書を閉じると大きくため息を吐く。

一体何なのだらうか、この状況は。およそ理解の範疇を超えてい、しかしどしても悪夢として醒めてはくれないこの現実は、一体いつから私の日常に紛れ込み始めたのだらうか。考えてみるとそれは、やはりあの時を置いて他にはないようと思えた。

図書館で彼に額を触られたあの瞬間である。あの時にどうやら私は彼の言うそのアポロギアとやらに目覚めさせられてしまつっていた

よつなのであつた。が……いやと、そこまで考えて私はうな垂れた額を手の甲で小突く。

これではもうほんと認めてしまつてゐるようなものではないか。あの白昼夢染みた一連の出来事が事実紛れもない現実であると、確かに私はどこかでそう信じ込み始めていた。だからその望ましからぬ考えを一擲いってきするよう勢いよく立ち上ると、私は手に辞書を携え静謐に静まり返つた室内を歩いて行く。

今は授業の合間の五分間休憩である。

当然人気の少ない中を私は辞書コーナーまでたどり着くと、本棚の前で少し背伸びをしつつ手にした辞書を元の場所へと戻そうとしたのだけれど、その瞬間。ぐらり、体が傾かしいだ。

何事かと慌てつつも何とか辞書を元の場所に押し込もうとして、しかし敵わずまたである。今度はどすんと真下から突き上げるよつな強い衝撃。勢い私は辞書から手を離してしまい、激しい揺れに翻弄されるがまま、思わずその場にうずくまり掛けたのだが、それは理の当然であった。目の前の書架から一斉に本がこちらに向けて落ちてきそうになつていて……もう無我夢中である。私はそれらの背表紙を必死に中へと押し止めようとしたのだけれど、果たしてどうやつたのだろう 私は、一体どのようにしてその窮地を凌いだのだろうか。

気がつけば揺れはすっかりと収まつていて、何やら貸し出しカウンターの方から声が響いてきていた。どうやら図書委員が室内にいた生徒たちの安否を確認しているものらしい。やがてその声は私の元へもやってきたのだけれど、「あの……、大丈夫ですか？」

「はい」

答える私にしかしその彼女 いかにも図書委員という雰囲気の少女はなぜだかひどく驚いた様子である。どこか納得のいかないような視線を最後までこちらへと残すようにしてその場を去つて行ったのだが、そのままを訝しく感じつつもそうだと今更のように目の前の書架へと向き直つていた私は、多分それ以上に驚いた顔をして

いたと思つ。

だつて……、ただの一冊もである。

私の目の前の棚だけがそう 右も左も周囲の他の書架からはあらかた本が飛び出してしまつていたにもかかわらず、まるで揺れがあつたことそれ 자체を否定するかのよう、実に整然とした姿を保つていて、そこから落ちてきた本など一つもないのであつた。

しかも『一寧に先程私がその手を放してしまつていたあのギリシヤ語辞典までもがぴつたりと棚の奥まで押し込まれてある。最早ただただ呆然と目の前の光景を眺めるしか術がない私であつたが、その段になつてようやくはつとした。

そうだ この揺れ。こんなのはこの前の比ではない。

私は慌てて制服のポケットから携帯を取り出すと祖母の携帯へ電話を掛けようとしたのだけれど、正にその機先を制してのことだつた。掛ける前に掛かつてきていた着信を反射的に私は取る。

「何……、どうしたの？」自分でも微かに声が震えているのが分かつた。何しろこのタイミングで、しかも相手は母なのである。

今はまだ会社のはずだつたが、何かがあつた知らせである可能性も皆無ではなかつた。がしかし、『いや、何つてわけじゃないんだけどさ。大丈夫だつた？』どうやら杞憂である。母は特別の理由があつての電話ではない旨告げると私の安否を尋ねてきた。

「うん。大丈夫。周りは……」言つて、周囲の惨状を見渡す。「結構大変な感じだけど、でも別に怪我とかは」特になし。無論それは今日の前にある書架が私に本の雨を降らせなかつたことが多く寄与したことではあつたけれど、もちろんそんなことをわざわざ言つつもりはなかつた。

「それよりも」気掛かりなのは祖母のことである。それについて言い掛けた時、またしても機先は制せられた。『分かつてゐる』みなまで言つなど一言の下に撥ねつけられる。

『様子は私が見てくるから。だからあんたは学校にいなさい』

「会社は？」

『大丈夫』そんなことはお前が心配する』ことではないと言われたような気がした。それくらいには強い口調。『家についたら連絡するから』

「うん」最早一歩からは何も言ひつけがなかつた。全てはお見通し。母はいつでも私を私自身よりよく知つてゐるのである。いつの間にか屋外そとでは雨あめが、愚図り出したように一斉に降り始めた。

確かめるならひとつ　早い方がいいに決まつっていた。だのにひとつしてだらう。私は授業中でも気もそぞろ、しきりに机の下に隠した携帯を気に掛けっていたにもかかわらず、あれから一時間が過ぎ、二時間が過ぎて、最早終わりのH.R.の最中である今に至るも一向に掛かつてこない母からの電話に焦れてこぢらからといつ氣になれずいたのだった。

いや、分かつてゐる。正直なところを言えればむしろ逆であった。すぐにやつてくるだらうと信じ込んでいた連絡が、しかし待てど暮らせどやつてこないことで、私はもう気掛かりの限界を越えてしまつていたのだった。だから恐らくはすでに確定してしまつてゐるであろう現実を、しかしそこから田を背けることで不確定なままに留め置こうとしていたのである。けれどもむろんそれは当然の成り行きであった。

いくら遅れようとあの母が約束たがを違えることなどあり得えようはずもない。

折も折、終礼のあいさつを終えて放課後と相成つた正にその時のことである。あたかも授業が終わるのを虎視眈々と見澄ましていたかのような実に嫌なタイミングで携帯が着信を告げていた。

「……はい」

高鳴る鼓動を押さえつつ電話を取る。と、もちろん聞こえてくる

のは母の声。しかしその口調はどこか私の知っている彼女とは別人のもののように思えた。

「落ち着いて聞きなさい」言うが何だかもうすでに止めでも差されたかのような心境である。静かに次の言葉を待つ。

「おばあちゃん……家にいなかつた。でもすぐ近所のみなさんが手伝ってくれて……探したんだけど」

「うん」じつと手のひらは汗で湿っているのに、背筋は凍えるように寒かった。母はひと呼吸の間を置いてから意を決したように言ひ。

「嫌な予感がしてね。それで慰靈碑の方まで行つてみたの。そしたらおばあちゃん、やつぱりそこにいて……でもね」

そこで力尽きた。らしくもなく苦しげな息を吐いて、母は多分言葉をオブラーートに包もうとしたのだろう。けれどそれは上手くはいかず、ただ単に残酷な結論だけを私の耳へと齧る結果になってしまった。

「今は病院で……まだ、意識が戻らないの」

どうやら雨は更にその激しさを増したようである。

いつもははきはきとした口調が特徴の母の、しかし今日に限つては実にたどたどしい説明によれば、祖母はびつやら急性肺炎に罹つてしまつたものらしい。

元々最近少し風邪気味だつたといひに雨の中出歩いたのが追い討ちとなつたようである。廊下の長椅子に深く腰掛けつな垂れていた私は、先程の母とのやり取りを思い出していた。

「「めん。すぐに連絡しなくちやつて思つたんだけど……、学校に直接電話してもつて……でも」

「お父さんには?」

「うん。もうわざわざ連絡した」

「そう」「駆け着けた病院の一室で私を待っていた母は、もう何だか急に老け込んでしまったかのようだった。短いやり取りを終えて傍らのベッドを見やると、そこには何とも痛ましい姿で横たわる祖母の姿がある。

酸素マスクの中で弱い呼吸を繰り返しているそのさまは、何だかやはり私の知らない誰かのようも見えて……、急に涙が滲んできた。けど必死に堪え、唇を噛む。

「私が広場に着いた時にはもうおばあちゃんびしょ濡れで……、それで海の方を指差してね。ずっと……、何度も、何度も、『津波だ』って……、『津波が来る』って、そう呟んで……」

もう今にもその場に崩れ落ちていきそうだった。うつむいた顔にまるで懺悔でもするかのようになつた母のその言葉が今も耳に残っている。

うな垂れていた顔を上げて、私は田に見えない敵の姿をその虚空へと睨みつけた。

「あなたはもう帰りなさい……。明日、終業式でしょ？」

半ば命令口調で言つた母の言葉に従つて病室を出たものの、しかし中々そのまま帰路に就くことができずにいた私はだから、一人廊下に備え付けられていた長椅子に座り込んでしばらく呆然としていたのだけれど、意を決したように立ち上がると、今度こそその場を後にすることにした。

そう、結局はあそこから全てが始まつたのである。

降り頗る雨の中、その灰色の建物は深く景色の中へと沈み込んで見えた。

しかし一步中へと足を踏み入れると、外の音はおろか、その存在そのもの、外界それ自体がすっかりと消え去つてしまつたようであつらくは窓という窓にブラインドが下ろされ、昼間であるにもかか

わらず煌々と館内が電灯の光に照らされているせいなのだろう。世界はただそこだけ、まるで終末の世にただ一つ残された最後の孤塹のようにさえ感じられるのであった。

私は以前来た時よりも更に輪を掛けて森閑と静まり返っている館内を、以前とは違う慎重な足取りで奥まで進んで行く。

なぜだろう。確心があつたのである。

果たして彼はそこ 書架の森の奥まで最奥、昨日と寸分違わぬ場所で、同じ姿勢、同じ表情でそこにいた。

私は無言でその対面の椅子へと腰掛けると、その気難しそうなうつむき顔を眺める。と、しばらくして彼はあたかも目を落としている本の一節を朗読するよつたな調子でこう言つた。「何か用?」とつさには反応できずに押し黙るもの、あれこれと考へるだけ無駄だと觀念した。「昨日……言つたよね」余計なあいさつは割愛して、思つてはいるそのままを言葉に乗せる。

「私に取つての問題が一体どこまでなのか……つて」

「そう?」空惚けるセリフとは裏腹に、声は肯定のそれだった。

「あれから考えた……。つうん。正確に言つとつゝさつき、ここに来るまでの間に必死に考へてみた」

「それで?」結論を急ぐふうでは決してない。期待する様子でも全くなくて、實に興味のなさそうに言つけれど、私は怯んだりしない。もうそんな余裕はどこかに吹き飛んでしまつっていた。だから言つ。決意を籠めて。

「全部だよ……。私の知る全部。私の知り得る世界の全て。私が知りうとするそのこと自体が、多分問題そのもの。世界にとつて、或いは人間にとつてそもそも問題つてそういうことでしょ? 出来事それ自体が問題なんじゃない。それを問題と思うか否かが問題なんだと思つ」

そこまでひと息に言つてから少しだけ不安になつた。果たしてそれが正解なのかどうか、本当のところは確信が持てなかつたからだ。しかし不意にページを繰る手を止めゆるく拳に固めると、独り言

ちるよに彼は言った。「だとしても、君にできる」となど何もないよ」

その言葉に一瞬で頭に血が上る。

「だつて言つたじやない君。世界はもつ私の手の中だつて「だから?」

「そのために見せたんじやないの? 私に」 真実の世界をと、そう言い掛けで口を噤んだ。どうやら私は自分でもそつと気づかぬ内に彼の言葉を信じてしまつていたらしい。そのことに改めて気づかされ、私はもう自分自身をどのように取り繕つていいのか分からなくなつてしまつていた。

「ここまで巻き込んでおいて今更……ひどいよ

「巻き込む?」

「だからだらうか。ついつい口からこぼれ出る恨み節。それに思いの外強い反応を示した彼はようやく視線をこちらへと向けていた。「だつてそうでしょう? あんな変なものを見えるようさせられただけじゃなくて、妙な力まで」

「その力が何か君の不利益になるような悪さをした?」

「え?」 予想外の反論に頭が真っ白になる。だつて……、昨日のあれからこの方、今まででは考えられないようなことの連續だったのである。なのにと私はその理不尽な物言いで反感を覚えるものの、いやとすぐさま心の中で首を振つた。

「君が得たその力は別に君を不幸にするものではないよ? そればかりか降り掛かる不幸を払いのけるのにならう」

確かに思い返してみれば言う通りである。今朝のあの状況と図書館での光景が目交いに浮かぶ。私は絶体絶命の危機から九死に一生を得てまでいた。

「あの宙を泳ぐ魚『転生魚』、アーマはね。人の憎悪や妬み、

恐怖といった不の感情を内部に取り込んで消し去つてしまえる……いわば悪意の浄化装置のようなものなんだ。だからあれの群がつている人間を避けるだけでも大分トラブルを回避することができるは

すだよ。もしかしたらすでにいろいろか心当たりがあるんじゃないのかい？」

言われてもう押し黙るしかなかつた。心当たりも何も、恐りくは私自身がその避けるべき誰かとなつてしまつていたのである。

「加えて君はもうほとんど万能とも言える能力まで得ている。それだけのものがあれば君が守りたいと思つているものくらいは簡単に守り通すことができるはずだ。あとは勝手にやればいい。君は君の問題を、僕は僕の問題をどうにかすればいいだけだ」

だからと彼は、まるで聞き分けのない子供を追い払うかのようにそこで言葉を区切つた。けれど……、「違う」私は今度は実際に首を横に振つてみせる。

だつてこの子の言つていることはやつてていることと全然違うのだ。「君はあの時、あんなにも悔しそうだつたじやない。必死な顔で……ずつと叫んでたでしょ？　なのに私のためにこんな力をくれただなんて……そんなの嘘だよ」

反論はしなかつた。けれどもちろん肯定も　それはする必要すらないとでも言わんばかりに彼は押し黙つたままだ。だから私は一人勝手に話を続けることにした。

「今日……、またおばあちゃんが倒れたの。あの場所で……慰靈碑広場で、多分あの時の君と同じようにだつたと思つ。海の方を指差しながら、『津波が来る』つて、そう叫びながら。だからもしかしたら君の言つていた『名前』つていうのはそのことじやないかと思つて」

自分でももう何を言つてているのかよく分からなくなつてしまつていた。まるで神様に許しでも『いつかのよつに顔をうつむけつつも続ける。

「ずっと分からなかつた。同じ家に住んで、同じ毎日を生きてたはずなのに、でも見ている世界が違つてた。だから　うつん、違う。ほんとは多分分からうとなんてしてなかつたんだと思つ。でも分かりたいの……、今度こそ」

今ならやうやく、心の底から願えると思った。

「もしもおばあちゃんを苦しめているものがあなたが知っているのなら、教えて欲しい」

「それで君はどうするの?」

まるで決闘でも申し込んでくるかのような厳しい表情だった。挑むように言ひ、彼に深く深呼吸。一拍の間をおいてから……、「私がそれを、倒しに行く」

微かに耳に降る雨音を吹き飛うかのように、私は勢いよく答えていた。

「君は『禁断の惑星』という映画を知っているかい?」

慰靈碑へと向かうシャトルバスの中で、彼は唐突にそんなことを聞いてきた。

「さあ……、ちょっと分からないうけど」首を捻りつつも反問する。

「有名な映画?」

時折揺れる車内にはもう雨の匂いがする。乗客は私と彼の二人だけだった。

「有名か……と言われば少し返答に困るけどね。二十世紀半ばのアメリカ映画で後世になつてからの方が評価が高いうFの名作なんだけれど……それに『イドの怪物』というものが出てくる」

「イド?」初めは?井戸?かとも思ったのだけれどどう違うのである。

「心理学用語さ。彼の有名な精神分析の創始者、ジーグムント・フロントが言つところの人の持つ動物的な感情側面 本能の源泉たる無意識領域。エスとも言つ。その具現化技術によつて作り出されたとされるのがその『イドの怪物』。有り体に言えば人の悪意の実体化だ」そこまでひと息に言つてからひと呼吸置くと、彼は不意に話題を転じた。

「今から一ヶ月程前、南米で巨大地震が発生した。これは知っているね」

「うん」確かにコガが言っていたものである。それから私も気になつて少し調べてもいた。

「津波が来るかもつて話があつたみたい。けど実際には大丈夫で……」

「別のモノがやつてきた」一瞬何のことか分からず呆然とする。が、

「別の……モノ？」

オウム返しに聞くと更なる転調である。

「僕たちの住むこの日本には古来、『ヨリガミ信仰』という觀念がある。寄り来る神。寄り来る神。そのような自分たちの住む場所とは別の世界を『他界』と称して特別視し、そこから威力ある何者が現れるという信仰は確かに日本ばかりではなく海外にも広く認められるものではあるのだけれど、海洋国家だからね、日本は。特別『海』、或いは『海の向こう側』という世界に対しての他界觀が発達したわけだ。けれど残念ながらこと日本に限つて言えばそれはただの想像力の產物には留まらず、つまり、本当にやつて来るんだよ。日本には」

「来るつて……、何が？」何となく予想もつきつつも問うと、案の定の答えである。

「『イドの怪物』　人々の怨嗟の結晶。憎惡の具象化。『レー・テの魚』　つまりアーニマによって浄化し切れずに凝り固まつた魂魄。二極の一対　魄の集合体であり、女性性に孕まれる男性性。再生の過程が示す破壊への予兆であり、万物に宿る陰の気。アーニムス……。遠い異国の人々の苦しみが生み出した人類の敵さ。遙か大海原を越えて、自分たちの苦しみを理解してくれるかもしれない人々つまり十六年前の震災の被害者たちの元を訪れた。今やこの地に再びの災いを呼び起こそうとしているもの」

「一体何なの、それ？」

「あれに名前などない。いや、名前はこれから見つけなければなら

「ない。今のは言つなればそつ……、ただの悪意の寄せ集め、群勢」
「レギオン……」

それはなぜだかひどく寂しげな響きのする言葉だと思えた。

バスを降りると雨はもう小降りで、傘を差す必要もなくなつていた。

私と彼はそこからほんのちょっとだけ、五十メートル程を歩くと、始まりのあの場所、彼と私が初めて出会つた場所、慰靈碑広場へとたどり着いていた。

「それじゃあいくよ？」

「うん……」答えるものの、「でもどうして？」納得できるかと言われば然に非ず。どこか不貞腐れたように言つ。

「私はそのテオーリアとかいうのに目覚めたんじゃなかつたの？
なのはどうして……」

「見えないのか」

「うん」

彼の話によればやはりその「イドの怪物」レギオンは、この慰靈碑広場の真上辺りにいるのだそうだ。けれどその姿は私の目には映つておらず、なお且つあのアニメと呼ばれる浮遊生物たちも先程から周囲に見当たらなかつた。

でも、「そこにいるんでしょう？」確かにいるはずなのである。その宙空を見つめながら言つ。「なのになんで……」

「それは君という人間がまだ人の惡意というものをよく知らないからだよ」

「まさか」冗談ではないと大仰に驚いてみせる。「私はそんな純粹な人間じゃないよ?」

「自分の中には理解できる人間なんていないさ。みな誰し

も失つてから気づく。けど君は今それをいきなり目の当たりにしようとしているんだ。それでも本当に

「

「構わない」今まで言わざず大きくうなづくと、何だか彼は複雑そうな顔をした。けれどすぐに諦めたようにため息を吐くと、改めて確認の言葉を投げ掛けてくる。

「怖くはない?」

「うん」

「後悔は?」

「ううん」

「準備は?」

「いつでも」

覚悟を決めて宙を睨む。と、彼の手が目の前へと翳されていった。

「目を閉じて、頭の中を空っぽに」言われた通りに軽く瞳を閉じると、目蓋のその向こうで指先が更に近づくのを感じた。そしてそのまま成り行きに身を委ねていると、耳に響く、囁くような声。

「盲目の求道者……、君のその盲目たる所以を今ここで解く」と

それはきっと魔法の言葉であつたに違いない。

まるで催眠術にでも掛けたかのようにリラックスした気分になつていた私の額を、あの時と同じ 図書館で意識を失つた際にそうであつたのと同じように唐突に彼の指先が触れると、次の瞬間、私の中に何かが生まれた。けれど今度はそこで意識を途絶えさせたりはしない。私は初めゆっくりと、しかし次いで決然と、意を決したように目蓋を押し上げ目の前の上空 あの日彼が指で指し示していった場所。或いは倒れる直前の祖母もがそうであつたやもしれない 見定めていたであろう慰靈碑の直上へと鋭い視線を放ち、そして……、

「どうだい? 初めて見る人間の絶望の姿は」

「うん」思わず眉を顰めていた。けれど決して視線を逸らすことはない。

「まるで化け物みたい」

「そうだ」力強く答える彼の言葉に更に目を見開いて見る。「あれが僕たちの敵だ」

その瞬間、ああと私は何だか分かつたような気がした。

にわかに曇天が裂けて、そこから日映ゆい、神々しい光の筋が幾筋も水な面へと落ちていた。それをまるで後光のように背負いつつ、それはぴたりと宙に浮いている。

体は ひと言で言えば球体をしていた。

多分大人が両手を広げて取り囲んだとしてもその数は十人は下らないだろうと思えた。 胴体はある浮遊生物たち アニマたちとは違つてしつかりと色がついており、決して向こう側が透けたりはしていない。そこからまるで球根のよう何本もの垂れ下がる脚のようなものが生えていて、左右からも少しだけ同じようなものが出ていた。それは或いは腕のようなものとして機能するのかもしれないがつたが、もしかしたら脚と見えているものも同様の機能を果たすべく備わっているものであつたやもしれない。そして何より異様なのはその口だった。

まるで胴体そのものを人の顔にでも見立てたかのよう。その中央には大きく横に裂けた亀裂があつて、奥には何か牙のようなものすら窺えるのである。

正にそれは化け物としかいよいのがない姿形をしていて……多分そう、私はいくらかの確信を持つて思う。見えないものを見るということは即ち自分の中にそれを受け入れるということなのである。

「氣をつける」その姿に思わず目を奪っていた私に彼が囁くように言った。

「余り深く見過ぎると取り込まれるぞ。あれは自分を知覚しないものには頓着しないが見られていると悟つたが最後、こちらが氣を抜いた瞬間にいつでも襲い掛かってくる」

なんとも恐ろしいことを平然と言つが、しかし、恐らくはもう手遅れだつた。にわかに返事のないことを訝つたのだろう。それはやや出し抜けの、多分かなりの声量で叫ばれた呼び掛けであつたに違

いない。

「おい」「緊迫した調子の声が轟くけれど、それは私の耳にはひどく遠い、どこか違う世界から聞こえてくるもののようにしか響かなくて……意識はもう、その中だつた。

すでに十二分に見開かれていた瞳を更に大きく見開いて、私は見る。その映像　いや、記憶だろうか。

見たこともない風景の中を逃げ惑う人々の姿がまるで走馬灯のように頭の中を瞬時に埋め尽くしてしまつていて、叫び、嘆き、憎悪する　彼らの怨嗟にすれもつ私は現実の外界へと開く感覚を全て封じられてしまつていた。

だからその時辛うじて彼の声が聞こえた時も、しかし体は全くといつていい程反応してはくれなかつたのである。

「馬鹿野郎！」

横合いから、私とその化け物　レギオンの間に割つて入るようにして彼が飛び出してくる。や否や、田の前には信じられないような光景が展開されていた。

「くそつ！」

先程まではただ体の下に垂れ下がつているだけだつたその根のような、脚のようなものが、まるで一つ一つが意思を持つた生き物でもあるかのような動きで私たちの元へと襲い掛かってきていたのである。それを彼は差し向けた右手の先で　多分あの力、アポロギアを使ってだろう。宙空で次々に弾き飛ばしていた。

「今日のところはここまでだ。逃げるぞ！」

そしてようやく意識のはつきりとし始めた私に向かい予想外のことを見つ。でも……、

「何で…？」折角ここまで来たのだ。もちろんそれは私の方から言い出したことではあつたけれど、彼だつてそのつもりだつたはずである。

「私たちはあれを倒すためにここまで来たんじゃないの？」なのにどうして……訝る私の問い掛けに彼は言葉ではなく実演を以て答え

を示した。

「見てる」ひと声告げるなり、田の前に差し出していた右手にむづ
一方の手を添える と、空中で伯仲していったように見えた彼の力
と向こうの攻勢のバランスが崩れ始める。と思にきや、それは一瞬
の出来事である。

まるで見えない刃物に切り刻まれでもしたかのよう。襲い来る球
根の根が手前から順に細切れに切り刻まれていって、それは根だけ
に留まらない 球根のその本体までもが粉微塵になってしまって
いたのだった。最早その姿は半分程がぼろぼろに崩れ落ちてしまつ
て見る影もない。と、言つのにである。「やつたの？」

「まだだ」

弛緩しかけた私の意識を再び引き締めるように彼が叫ぶ。と、「
何……？」思わず驚愕の声を上げる私の田の前で、それはあたかも
生物の授業の時間に見せられた細胞分裂の早回し映像のようである。
ぶくぶくと切り刻まれた断面が泡のように膨張していったと思いま
や……、「嘘……」

「再生する」田の前には最早悪夢としか言い様のない光景が展開さ
れていた。

「これくらいではあれは倒せない。なぜならあれも使うからだ。僕
たちと同じ力 アポロギアを」

「じゃあどうすればいいの？」

「もちろんあれのイデアを見出だすより他ない」

そこへようやく彼の言葉の真意を悟る。どうして彼が今まで執拗
にそのものの名前にこだわり続けていたのか。どうして一人図書館
でこの町の昔のことを調べていたのか。全てはそこに繋がっていた
のである。

「なら……、問題はないよ」けれども私は急に冷静になつて彼にそ
う告げた。

「何？」

「アポロギア……、あの力を直接あれに レギオンに使えばいい

んでしょ？

ならと、私は私を庇うように田の前に立ち塞がつてくれていた彼を押し退けるようにして前へと出る。「おーい！」

「大丈夫だよ」

言つて目を閉じる。その間際に見えた化け物の姿は最早あらかた再生し切つてしまつていたようだ。けれども恐怖はない。その代わりに感じるのはそう……目蓋の裏に浮かぶ、あのぬくもり。寝た切りに近い生活になつてから少し経つた或る日、私が体を拭いて上げていた時に祖母は突然そんなようなことを言つた。

「本能でいいのはもう頭の中にはないわね……あれは多分この辺り」トントンと、胸の奥の方を叩くようにして示す。「体の中心の辺りにあるものなんだと思つ」

ていた。

「分かっているのよ？ もうここはあの田までとは違う、決して地
続きにある田常ではないんだってことは。でもどうしても思えてし
まうのよ。あの田のあれは何かがほんの少し違つてしまつただけで、
今からでも遅くはない。何かをほんの少し繋げ直すだけでまたあの
田常はすぐにでも戻つてくるんじやないかって……そんなふうにど
うしても思えてならないの」 でもと、急に寂しげな表情になると祖
母は、分かってると、自分自身に言い聞かせるように、最後にぼそ
っとつぶやくよつとついた。

「あれはもう

その言葉が今ようやく意味へと行き合つたような気がしていた。

田を開き、見定める。その先でただその口のみ
必要な器官だけを備えて生まれた化け物が再びその根を私の元へと
放つていた。けれどもう遅い。

私は迫り来る憎悪に優しく触れるように手を差し伸べると、ひと
言 嘘くよう、元

「理不尽な終わり……」

そのものを生み出した所以をつぶやく。と、私の手に触れるや否やそれら根は崩れ、こぼれ落ちて そして、まるで赤ん坊の泣き声のような音色だった。

醜く歪んだ大きな口が、胸を締め付けるような悲痛な断末魔の声を上げていた。

全でが終わり、別れ際のことである。

「君は一体何者なの？」私はすっと気になっていたことを彼に聞いてみたのだけれど、その返答は予想していたよりも更に難解なものだった。

「僕は君さ……。君と同じ、ただの人間だ。ただ……」

「ただ？」

「多分生まれた時からずっとそつ……、遠く、世界の果てのような場所からいつでも声が聞こえていた。助けて……、助けてって。ずっと もちろん今だってそうだ。だから」血潮するように彼は鼻に掛かつたため息をひとつ吐くと、最後にこつ言つた。

「僕は救うことしか救われない生き物なんだ」

そして背中を向けてそのまま、さよならとさえ言わなかつた。彼は私の元から去つて行つて、だからつきり私はもうそれきりどうと考へていたのである。

なのに……、「澄一 美香。今日これからどうか行くでしょ？」

「あ、ごめん。私今日これから病院」

「あ、そつか」ぺろりと舌を出して、失言だと詫びるそれはジエスチャードらうか。ナコは昇降口から校門へと向かう途次、いつものお約束の言葉を掛けてきていたのだけれど、当然ながら今年は私はバスである。

「でも終業式終わつた早々じゃなきゃ別に時間あるし、私

「おばあさん、来週退院だつけ？」

「うん」それまでは何というか……もちろん家に戻ってきてからでも何の問題もないのだけれど、今の内にたくさん話を聞いておきたかったのである。

私は明日からも毎日のように病院へと押し掛けるつもりであった。

「まあいいや。それなら今日は七海と二人でも

「あ、ごめん。私も……」

「つて、ええ？」

何やら土壇場でもう一人にも裏切られてしまったようである。最早八つ当たり同然の物言いで食つて掛かっているが、それをどこか他人事のように聞きつつ私は一人さつさと先へと歩を進めていた。なぜだろ？ 何だか妙に晴れやかな気分なのである。足取りはいつもよりも数倍軽く感じられて、今ならば羽ばたいてどこまでもゆけそうな気さえする。けれど……、「わっ、何？」

田の端をゆき過ぎた人影に思わず足を止める。その背中に盛大にナコが激突した。

「澄美香？」七美の方も怪訝そうな声を掛けてくるのだけれど、しかし私はすぐには答えられずにいて まるで油の切れた口ボットのよう。ぎぎぎと機械の擦れる音でも聞こえてきそうな鈍い動作で私は振り返る。と、視線の先に彼 そう言えば未だ名前さえ知らぬままであった。あの少年 昨日のあの戦友が、何ゆえにかうちの制服を着込んでそこには立つていて……、「やあ、こんにちは」今気づいたとばかりに振り向きそのままの横顔にあいさつをしてくる。

「え、何？ 誰？」

「ちょっと……澄美香？ どうしたの？」

最早思考停止は免れず、一人の追求にも答えてやれる余裕はない。

今はそう 思えば春も半ば、桜もやがて満開の季節なのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9372v/>

終末のアポロギア

2011年8月19日20時06分発行